

# 家康公の不思議な肖像画

横松和平太

## 徳川家康と御成街道

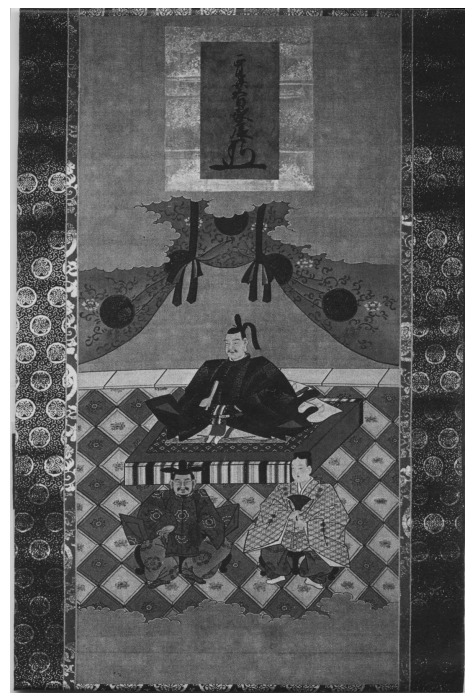
「徳川家ゆかりの街道とお鷹狩り」と題した講座を受講する機会があり、その一回目が、「徳川家康と御成街道」であった。それによれば、「家康は幼少の頃より大の鷹狩り好きであり、天正18年(1590)の江戸入府以降も関東各地で度々鷹狩りをした。鷹狩りは、武士就中覇者の娯楽として、心身の鍛錬による健康保持或いは軍事調練の為として多に楽しまれた。更に、下情の視察等も兼ねていたようだ。

慶長18年(1613)12月12日に、家康は江戸城に居た佐倉城主の土井利勝に対し急遽、翌年正月に、上総東金辺りで鷹狩りをしたいので、その準備を命じたと云う。利勝は、この命に応え僅か26日間という短期間で、船橋から東金迄の間に約34kmの新道を造成した。旧東金街道とは異なり、ほぼ直線道路を沿道の村々の農民達を動員し、昼夜兼行の突貫工事で完成させた。この為、この御成街道は別名一夜街道とも呼ばれた。更に、道路に加えて休憩・宿泊施設としての御殿(御茶屋、東金)を造営、街道筋の警護体制の検討、東金辺りの鷹狩場の整備などの段取り迄つけた。こうして、翌慶長19年(1614)1月7日江戸城からの鷹狩りの為の御成に無事間に合わせた。」

この時の御成街道の造成と鷹狩りは、単なる娯楽の為ではなく大坂での戦雲近付いていた頃であり、次のような説もあると云う。曰く、江戸から九十九里浜に至る逃走経路の確保の為、とか、今だ不穏な情勢の関東の外様大名への威圧の為ではとも云う。新設した東金御殿で大坂冬の陣の密談をしたのだと云う説もあるようだ。何かにつけ慎重な事で知られる家康のこと故有り得たかも。

この鷹狩りの後、11月には大坂冬の陣を戦い、翌年には夏の陣で豊臣家を滅ぼした。その年、元和元年(1615)冬11月には、二度目の東金辺りでの鷹狩りを楽しんだのだが、翌年の元和2年4月には亡くなってしまい、御成街道に再び姿を見せる事は無かったと云う。

御成街道を使つての鷹狩りに協力した地元の有力者として、講師の先生が指摘されたのは、船橋大神宮の神官・富氏の存在であった。富氏は自らの土地を家康の宿舎の為に提供するなどしたと云う。富家には家宝として家康公の遺品が伝えられているとされ、資料として家康自筆の花押入りの書状類と共に、徳川家康画像の白黒写真を提示された。右の画像が、それである。この画像について、講師の先生は、やや訝しげに、こう説明された。



「この三人は誰でしょう。上段の人物が家康。下段 向かって左が、秀忠。右が、家光でしょうか？中央上部の署名と花押は家康の自筆です。正月廿五日家康と署名されていますが、でも、なんだか変な肖像画ですよね？。慶長19年正月7日東金御殿に来て、16日に千葉に向かい、その後船橋御殿にしばらく滞在した。と、ありますので或いはこの時のことかも知れませんね？」



この肖像画の資料を見、説明を伺ったのだが、私には大いに訝しく思えたのだった。まず、三人像という配置がとても珍しい。しかも、下段左側の人物だけが正面を向き、残る二人は左向きだ。それに、上段の家康が普通イメージしている肥満体の老人とは違う。今迄見た事のない肖像画であり、明確にこうだとは言えなかったのだが、強い違和感が残った。そこで、この資料の出展を質問させて頂いた処、東金市教育委員会発行になる市史編纂史料とのことであった。この三人は本当に、「家康・秀忠・家光」なのか？自ら、調べ、確かめて見たくなったのだった。

### 東金・富家秘蔵の家宝

東金市教育委員会発行の史料を探しに、東金市図書館まで出かけて見た。肖像画のコピー片手に探そうとしたが、なかなか見つからない。職員の方に調査方を依頼しておいた処、後日連絡が有り、『東金市史総集編』(1987年刊)の中にあるとのこと。早速、地元浦安市の図書館で紐解いてみた。口絵にカラー写真が掲載され、本文中に「徳川家康遺跡品(富家蔵)」の項目があり、解説があった。要点は次の通りであった。

- 富家は、元々船橋大神宮の宮司であり、境内の常盤神社の宝物を代々保管してきた。
- 明治時代に富家は宮司を退き、昭和になってから東金市の旧東金御殿近くに移住した。
- 先祖伝来の「常盤御箱」は、箱の由来書きにより江戸時代中期以降秘蔵されてきた。
- 昭和57年(1982)に、家康研究の一助になればと、開封し公開したものである。
- 肖像画は家康直筆の書状・文章・絵・枕槍、秀忠の書等、13点の内の1点である。
- 駒沢大学所理喜夫教授等家康研究の専門家はこれらの史料を90%以上真筆と鑑定した。

尚、文中には地元の新聞『千葉日報』が、昭和57年(1982)12月23日付けで、「歴史の口マン秘めた御箱一家康史料が十数点……」等、と云う見出しで報じられ、翌24日から

「家康“出現、東金・富家の秘蔵公開」として十数日にわたって報じている旨、紹介してあった。

肖像画についての詳しい説明が、『東金市史総集編』には無かったので、当時の『千葉日報』のバックナンバーを当たって見た。富家の家宝についての連載記事の中に、「掛軸」と題した文が見つかった。そこには、こう書かれていたのである。

見出しには、「絵に直筆添付?」、「御神像としてあがめる」とあり、その要点を記せば次のようになる。

- 家康が上段に座り、二人が仕えている。
- 周囲には、葵の御紋が描かれている。
- 上部の署名、花押は真筆と鑑定された。
- 真筆の署名は、文禄か慶長期、肖像画は寛永(1624年)以降。つまり時代が異なる。
- 寛永以降の絵師が描き、そこに署名・花押を後から添付したのでは?
- 富家には、ほぼ同じ肖像画がもう1枚有るが、そちらには署名はなく葵の紋もない。
- おそらく2枚描いて貰い、気に入った方に家宝として保管されていた家康直筆の署名を貼り付け、神像として崇めたいらしい。
- 絵師は絵具の使い方から見て狩野派だろう
- 代々、船橋大神宮の宮司であった。高位の神官という地位と、船橋御殿用地を提供したりした縁で、交流を深め葵の御紋の使用を許された。
- 家康没後はその御神像を肖像画で具現化し、より神聖化するため直筆の書を添付した。全国唯一のものとして貴重といえる。

この記事では、上段の人物は家康であると断定し、何故か下段の人物が誰であるかについては言及されてはいない。そこで、カラー版の肖像画を今一度じっくり眺めて見た。葵の御紋の入った衣装の上段の人物が家康だとするならば、下段右側の少年は年格好から孫の家光か、すると左側はその父親の秀忠ということになるのか? しかしやはり釈然とならない。家光は間違いのないとしても、左側の人物が秀忠だとすれば、どうして家光と同じ位の大きさなのか? どうして独りだけ正面をむいているのか? どうして、徳川将軍なのに衣装に葵の御紋が入っていないのか? 家康への配慮なのか? 冠の形も違えば、年格好も上段の家康と余り変わらないようにもみえる。

確かに今迄見たことのない珍しいものだが、やはり不思議な肖像画と思えた。もしかしたら、下段左側は秀忠ではないのかも知れない?、と思えてきた。だとしたら一体誰なのか? 又、上段の人物は家康であるという前提も疑ってみたくなった。富家の人は、いつ、どんな時に、肖像画の制作を、誰に発注したのか?

ここは本腰を入れて謎解きに取り掛かることにしてみた。

### 絵画史料としての肖像画

かつては「源頼朝」とか「足利尊氏」の肖像画だとされたものが、近年では絵画史料としての研究が進み、必ずしも本人ではなく別人かも知れないとされるようになってきた。

肖像画を絵画史料の視点から分析する手掛りとか約束事がありそうなので、関連書籍を数冊読み進めてみた。そこから解ってきた主なポイントは次のようだった。

**作画の目的**は、尊敬・崇拝する人への礼拝・供養・追慕・鎮魂等多種多様である。

●生前に作画されたものは寿像といい、多くは武将達が己の権力を示唆する為のもの。

●その目的は画面上の賛とか、外題・覚書・添状或いは伝承でを知ることができる。

今回の肖像画の場合、常盤御箱の由来書に、「東照宮様御自身御勸請御箱にて、各前の御尊恵によって御封じ.....」とあり、没後に、東照大権現となった家康崇拝の為であるのは間違いない。但し、崇拝の対象が家康個人であるのか、或いは家康を始祖とする徳川將軍家であるのか、については更に検討の余地があるように思えた。又、作画の切っ掛けとなった出来事は何であったのかについても同様であると思いたい。

**三人像という形態**だが、上段・下段に三人を配したものを、三尊形式と云うが極めて例が少ない。探してみたら藤原鎌足を本尊とした三尊像があった。



この肖像画では、鎌足を御本尊らしく大きく描き、下段の右側に長男の兄の定恵、左側には次男の不比等を配している。

●左右に人物が配される場合、普通は正面向かって右側が上位者、左側が下位者とされる。

とあるので、今回の画の場合だと、右側が家光なので左側の人物は、その下位にあたる人物となる。とすると、やはり父親の秀忠では不都合となる。何故か訝しく思えた要因の一つの要因のようだ。

**人物の向き**であるが、

●左向きの例が最も多く右向きがそれに次ぐ。

正面向き、とか横向きの例は少ない。

●日本画には陰影法がなく、技術的に表現が難しいから

●正面像は精神的・宗教的な意味を持ち宗教画に多い。

正面像には、武将を描いたものも多いが威圧的な表情を描くのに適しているのかも知れない。

今回の画の場合は、如何なる理由で独りだけ異質な正

面像としたのか？ 不可解である。

**画中の装置・小道具**については、次の点に着目したい。

●御簾・戸帳・狛犬・欄干・上置等は神殿のイメージを出す為のものであり、像主が神仏として祀られていることを示す。

今回の画でも、家康を始祖とする徳川將軍家を神格化する小道具として使われている。

次に、装束・持物も分析の手掛りとなるようだ。

●衣冠束帯姿は高位の証で、冠、上衣、袴等、位によって規定があるが、時代による違いもあるようだ。

●持物では、武将であれば太刀がつきもの、手にするのは公家であれば昇殿用の笏とか檜扇等である。

今回の画では、上段の人物は徳川將軍家らしく衣冠束帯姿に太刀、手には笏か？家光は元服前なのか稚児姿と違和感はないが、下段左側の人物は何処か違和感がある。公家なのか、武家なのか、はたまたそうでないのか、何処かおかしいのである。

**花押**であるが、サインのことであり、通常はサインした人物本人を示すのであるが、

●上部に有る場合には、その人物より下位の人へのサインであることが有るらしい。

今回の画では“日付け入り署名と花押を後代に添付したもの、であり、上段の人物が家康本人とも云えるしその下位の人物とも云える。従って人物比定の決め手にはならない謎はまだまだ続くのだ。

上段の人物は、本当に家康なのか？下段左側の人物が秀忠ではない、とするのであるなら一体誰なのか？又、どうしてこの様な三人像とし、家康の単独像としなかったのか？先ずは、三人像の眞の像主を比定するべく、家康と秀忠が他の肖像画ではどの様に描かれているのか？探つてみることにしたい。

### 肖像画にみる家康と秀忠

“肖、と云う字は“似姿、を意味しているが、日本画では必ずしも逼真にえがくものではなく一像主の全人格を内在させたもの一という。画に描かれた面相や体型からある程度特定の個人を特定でき、その人物像を掴めそうである。家康と秀忠の肖像画とされているものから、今回の画中の人物との比較を試みその比定を試みてみたい。

### 家康の肖像画

家康の肖像画には、大きく分けて二つのタイプが有るようだ。

一つ目は、東照大権現として神格化された肖像画である。三代將軍家光は家康を大変崇拜し、日光東照宮の造営に合わせ描かせた。狩野探幽が寛永16年(1639)から正保8年(1647)にかけて作画したという。発注者の家光、制作者の探幽は共に彼らの少年時代(家康の没年時に、それぞれ12歳と14歳)、最晩年の家康の姿に接しており、風貌を眼にしていた。このタイプの肖像画はいわゆる豊頬肥満の老人姿、征夷大將軍の貴人、神像である。

こうした型に嵌まった狩野派風の神君像とは違って、寛いだ姿の晩年の家康像も久能山東照宮に有るようだが、見た事はない。



第二のタイプは、右下の画像のように眼光炯炯とした武張った武人姿のものである。壮年時代の戦国武将を思わせるものだが、数は少ないとされる。徳川美術館蔵の“しかみ像、(三方ヶ原の無様な敗戦の教訓の為に描かせたともものと伝わる)も有名だが、下の画像も共に正面像であるのが共通している。

家康と云う人物は、色々と謎の多い人である。その出自の謂われから、影武者や別人との入れ替わり説まで様々な異論・異説がある。村岡素一郎が明治35年(1902)に著した『史疑徳川家康事蹟』を嚆矢とし南條範夫、八切止夫のもの等、家康の謎を素材にした史論・小説はあまたあるが小説では隆慶一郎

の『影武者徳川家康』(1993年刊)が傑作ではなかろうか？

いづれにしろ、今回の画で上段の人物が家康であるならば、作画の時代は寛永以降、絵師は狩野派と云うことであり、第一の貴人タイプということになる。しかし、豊頬でも肥満でもなくややほっそりとし老年でも無さそうに見える。一体いつ頃の家康の姿を描いたのであろうか？



### 秀忠の肖像画

一方、秀忠の肖像画であるが、家康像に比べて数が少ない。彼の姿・形を伝える手掛り



も少ないのだが、スペイン人ドン・ロドリゴが著した『日本見聞録』の一節に、秀忠と会った時の印象が記されている。慶長14年(1609)、ロドリゴは前のフィリピン臨時総督として任期を終え、マニラからメキシコ経由で帰国の航海中に房総半島沖で座礁・遭難。今の御宿辺りに上陸した。彼は、江戸で将軍秀忠と会見し、ついで駿府に来て家康とも会見した。この時を始め日本滞在時の模様を書き著したのである。文中には次による。

「皇帝(家康)は61歳(実は67歳)の中背の老人で、尊敬すべく愉快的容貌をしており、太子(秀忠)のように色が黒くなく、また彼(秀忠)より肥満していた」

つまり、この時秀忠は家康よりほっそりした色黒の青年(30歳)だった、と証言している。この肖像画が、何歳頃の姿を表しているのかは不明だが、壮年以降の姿のように見える。壮年になっても家康のように肥満はしていなかったようだ。

二人の肖像画を比較してみると、今回の肖像画で上段の人物は家康というよりは、むしろ秀忠と見た方が無理がないと思える。先に見たように、下段左側の人物が秀忠である可能性が低いとすれば有り得ることでは？ これまでの処はそう思える。

本当に、上段が家康ではなく秀忠であるのか？とすれば下段左側の人物は誰なのか？又、新たな謎が増えた。正面を向いて、明らかに将軍とは異なる出で立ちの人物に比定できる候補者はいるのか？ 更に考察を進めてみたい。

## 徳川将軍家と富家

真の像主を探るには、肖像画が制作された当時の、時代背景の確認が欠かせないと気が付いた。ざっとしか読んでいなかった『千葉日報』の連載記事をはじめ関連文書を熟読することとした。元々、今回の肖像画の制作・発注は船橋大神宮の宮司であった富家であり、それを今日に至るまで秘蔵・保管されてきたのも富家の人達だった。富家と徳川将軍家との関係はどんなものであったのか、そこを探ることで画中の人物を比定する手掛かりとしたい。

## 富家と船橋御殿

富氏は、遠く平安時代にまで遡る系図を持つ船橋大神宮の宮司を代々務めた高位の神官であった。船橋大神宮は、日本武尊の戦勝祈願の地と云う創建伝承を持つ古社である。家康が初めて参詣したのは、江戸入府間もない天正19年(1591)のこと。関東の惣社にして江戸城守護の神社として参宮—この時富氏の屋敷を仮の御殿とした—と古書に伝える。これが富家と徳川将軍家との縁の初まりのようである。時の当主は富基重であった。彼は関ヶ原の戦いに家康軍に付き従ったという伝えが有る程、家康命の人だったようだ。そのかいあってか、慶長13年(1608)家康は、神社の改築を命じ木造の日本武尊像を奉納した。更に慶長17年(1612)、富氏より土地・邸宅の提供を受け家康の命により関東郡代の伊奈忠政が船橋御殿を造営した。土地は約4800坪という広大なものであり、御殿は鷹狩りの際の休憩・宿舎として使われた。くだんの御成街道の造成に先立つものである。

## 船橋御殿と家康

完成なった御殿に、初めて家康が訪れたのは、慶長19年(1614)の御成街道を使っの東金辺りでの鷹狩りの時であったのは先にみた通りである。1月8日に東金への往路で、船橋大神宮に参拝し、御殿で休憩している。泊まっではないようだ。二度目に訪れたのは、死去の前年の元和元年(1615)の11月のこと。東金辺りでの鷹狩りへの往路、11月16日には休憩し、帰路の11月25日には宿泊したと『徳川実紀』は伝えているとのこと。地元の伝承によれば、「この時船橋市中で火事が発生、民家は悉く焼失したが御殿は火災をまぬがれた。又、これは家康の命を狙った賊が火を放ったものであり、鉄砲で撃たれもしたが、神主の富氏が助けた」とある。後日談では、助けて貰った家康は神主に「ほうびとして望みのものを与えるから後日申し出よ」と感謝したが、後日申し出ると「そのようなことを言った覚えはない」と答えたと云う。老人ボケなのか？単なるタヌキなのか？家康は、江戸

城に戻り12月17日まで滞在、その後駿府に戻った。この後日と云うのは江戸城滞在中のある日のことか？まさか駿府まで追いかけたとは思えないが。

### 署名の日付

家康の署名・花押を富氏は入手し、これを画中に添付した。日付は正月廿五日とあるがいつの年なのかがよく分からない。講師の方は慶長19年のことではないか？とされていたがどうであろうか？。検証してみた。

富氏が署名を入手する機会があるとすれば、恐らく家康が江戸城に滞在中か、鷹狩りなどで船橋辺りを含む関東近郊であったであろう、と思われる。専門家の筆跡鑑定によれば文禄から慶長にかけてのものとのこととされている。そこで、文禄より前の天正18年(1590)の江戸城入府以降で慶長19年(1614)までの間で、正月に江戸城又は関東近郊に滞在していた年を調べて見た。『東金御成街道を探る』(本保弘文著)の中に、『武徳編年集成』という古書より作成した年表「徳川家康関東入国後の行動」があった。

この史料によれば、七回は滞在している。この中で、富氏と間に深い関係が生まれた船橋御殿造営以降となると慶長18年以降となるが、18年は駿府城なのでNG。残るは19年だけで有る。よって正月廿五日の署名はこの年である可能性が高い。更に、この日はどこに居たのかを特定してみたい。—8日船橋大神宮参拝後、9日から15日まで東金で鷹狩りし16日に東金を出立つ。千葉で滞在し(船橋は休憩だけ)葛西を経て19日に江戸城に戻り、29日まで滞在一とあることからすれば、江戸城に居た。そして署名をした、となる。

船橋御殿造営に多大な貢献をしたこと等への感状だったかも。感状であったとするならば、どうして署名・花押の部分だけを肖像画に使ったのか？ デザイン構成上の必要からか？ 今となってはよく分からない、としか言いようがない。かくの如く家康と富氏の縁は深く、その後富家が崇拜し続けたのは故なしとしないのだ。

### 秀忠・家光と富家

慶長10年(1605)将軍に就任した秀忠は江戸城に居住し、東金辺りを始め関東で鷹狩りを家康同様楽しんでいる。家康は御成街道と船橋御殿を利用したのは2回程だったのだが、秀忠はどうだったのか、次に見てみたい。

秀忠が、東金辺りで初めて鷹狩りをしたのは慶長15年(1610)の10月。船橋御殿も御成街道もまだない、船橋から東金の間は旧東金街道を通ったはずだ。船橋御殿造営後に初めて秀忠が東金辺りでの鷹狩りに出掛けたのは、元和3年(1617)家康逝去の翌年11月だった。この年以降、秀忠は毎年の様に東金辺りで鷹狩りを行い船橋に9回やって来た。大神宮に参拝し、御殿で7~8回は宿泊・休憩したに違いない。それだけではない、元和8年(1622)には舟橋大神宮の境内に末社として常盤社を造り寄進した。富家の家宝・常盤御箱の由来となったあの神社である。この時、木造の家康像を納め御神体としたと云う。最後に東金辺りに鷹狩りにやって来たのは、逝去の前々年寛永7年(1630)の11月だった。東金辺りで



の鷹狩りは実に都合10回を数える。家康より遙かに多いのである。その都度、富氏は秀忠に接見したことであろう。

三代将軍家光は、日光東照宮の大造営等、家康を大変に敬慕したことで知られている。しかし、鷹狩りには余り熱心ではなかったようだ。大納言時代の元和6年(1620)に一度、御成街道、東金辺りでの鷹狩りを行なっただけである。

富家との関わりで言えば、常盤社に木造の秀忠像を寛永11年(1639)に寄進、船橋御殿の修理も行なっている。

家康・秀忠・家光三代の徳川将軍家と富家の間は、以上のように緊密な時代が続いたのであるが、よく見てみれば、誰よりも秀忠との関わりが殊更深いように思えるが、どうであろう。この視点からすれば、富家が肖像画を発注・制作し代々神像として崇める動機が強かったのは、家康より秀忠だったのかも知れない。

上段の人物はやはり秀忠であると思いたい。

徳川家と富家の所縁の船橋御殿であるが、造営から約60年後の寛文11年(1671)に取り壊された。御成街道と共に造営された東金御殿、御茶屋御殿(千葉市)も一緒に消え去った。しかし、富家は返却された船橋御殿の跡地の中央に、東照宮を建立し東照大権現を祀った。徳川家への崇拝は一方ならぬものがあつたのである。

そこで、今回の肖像画である。家康・秀忠・家光の位置付けは見えてきたのだが、やはり下段左側の人物をなかなか比定できない。その候補者には何が必要なのだろうか？

- 秀忠・家光よりは下位の人物であること。
- 秀忠・家光を支え、仕えた人であること。
- 船橋大神宮・船橋御殿・常盤社に所縁のある人。
- 富家からみて、恩があり、崇拝の対象となる人。
- 三人の風貌・年恰好から見て秀忠とあまり年が離れていない人。

こんな条件に当てはまる人物はいたのか？

先程の徳川将軍家と富家の関係史をもう一度眺めて見た。すると、一人いた。佐倉藩主、老中・土井大炊頭、利勝が浮かび上がって来たのだった。

### 土井大炊頭、利勝

土井利勝は、草創期の徳川家にとって欠かすことの出来ない功臣である。天正元年(1573)浜松の生まれ。家康より31才年下、秀忠より、7才年上である。由緒ある三河譜代の出ではないが、幼少の頃より家康に仕え寵愛を受けた。実父は刈屋城主水野信元とも、一説には家康の落胤とも謂われた。秀忠誕生と共に秀忠付きとなり、その子の家光の代迄生涯支え続けた男であった。



慶長10年、秀忠が將軍宣下を受ける為上洛の折、共に参内した利勝も従五位下・大炊頭に叙任された。佐倉32400石に、下総小見川10000石より転封されたのは慶長15年春のこと。この年、幕府の老職(後の老中のこと)となり、大久保忠隣、酒井忠世と肩を並べる重臣となった。

冒頭でみたように、家康の東金辺りでの鷹狩りは土井利勝の奮闘抜きでは語れない。御成街道・各御殿の造営、滞在期間中の警護や賄いまで、その果たした役割は大きい。又、家康の葬儀にあたっては、これを取り仕切ったと伝えられる。

秀忠から家光にかけての時代は、幕藩体制の基盤が固められた時代であった。武家諸法度、参勤交代、外様大名の改易・転封等の諸政策取り仕切りの中心人物であった。寛永3年(1626)には、大御所秀忠の上洛に随行し、従四位下・侍従に昇進した。晩年の寛永15年(1638)、幕府初めての大老となり、その智謀振りから“智の大老”と呼ばれた。

利勝には、こんな逸話が伝えられている。武士が髭を蓄えない様になったのは利勝に始まると。戦国から江戸時代初期まで武士は、強さと逞しさの象徴として髭を生やすのが常識だった。ところが、家光時代の後半からこの風習が廃れていく。利勝は落胤説明がある位、風貌が家康に似ており本人も、それを畏れ多いと気にしていたと云う。年取るにつれ、江戸城内でこの噂が広まると、利勝は噂を避けようと髭を落とした。これを真似する武士が城内から市中へと増え、やがて普通の人にも髭を生やす習慣が廃れたという云う。

肖像画にみる徳川將軍像の変遷をみてもこれは明らかである。従って、利勝晩年の肖像には髭がない。今回の肖像画の人物は髭がある。よって、作画の時代設定は家光時代前半、寛永15年(1638)位以前であることになる。

小見川、佐倉の藩主としての利勝は、殖産、治水、植林、新田開発などの善政により領民より慕われたようだ。「土井様日待ち」という供養の行事が今日もあると云う位だ。

船橋御殿の造営・御成街道の造営・東金辺りでの鷹狩り遂行の現場の指揮官は、利勝であった。船橋大神宮の神官・富基重も、寛容な性格で民政に心を砕いた利勝の人と成りに触れ、おそらく崇拜の念を抱いたことと思われる。この利勝を下段左側の人物と想定出来ないであろうか？彼であれば、前述の条件をクリアできるのでは？

徳川將軍家三代に仕え、支え続けた功臣。船橋御殿・御成街道・船橋大神宮との関係も將軍家を通じて関係深い。富家との関わりも充分にあり、敬慕されていたに違いない。年恰好も秀忠とあまり離れていない。

富氏は、寛永10年(1633)秀忠公の1周忌と、この年佐倉から古河16万石へ転封となった土井利勝を追慕する為、肖像画の制作を思い和3~4年頃とした。鷹狩りに頻繁に訪れ始め頃まだ元服前だった家光を下段右側に配した。股肱の臣、土井利勝を配した。最上段には以東照大権現の象徴として添付した。こう考えはありうる。更に、この仮説を裏付けるべく下段左側の人物の装束に着目してみた。上衣



立った。画面の時代設定は元めた秀忠を上段に配し、その左側には秀忠・家光を支えた前拝領した家康の署名花押をられないだろうか？この仮説

に入っている模様は何だろう？家紋かも知れない。土井利勝の家紋を調べてみた。すぐ調べはついた。「水車紋」だ。肖像画にある模様ととても似ているように思えた。これはかなり核心に近づいた。と、思えた。決定的かと。

## 終章

下段左側は、土井利勝だ。と考察は辿り着いたのだが、まだ気になることが残っていた。利勝の装束は、高位の官僚としての服装規定に合っているのか？持物はどうか？についても確かめねばならない。そこで、この利勝と思われる人物の出で立ち・持物を江戸時代前期の服装史にひき合わせてみることにした。

まず被り物である。冠ではなく帽子の様なものを頭に乘せている。これは何だろう？。左右に羽の様に飛び出ているものがある。豊臣秀吉の肖像画で見かけたような気がしたので調べて見た。どうやら朝鮮国の貴族が官服用の際に被った〈紗帽〉のようだ。一種の一種の変り烏帽子ではなかろうか？利勝は朝鮮使の接待役の経験もある、それに因んだのか？

上下の衣服は、形から見て〈狩衣〉に〈指貫・括り緒の袴〉のようである。大相撲の行司の装束に見られるような〈直垂〉姿ではない。江戸幕府の礼服規定によれば、三位・四位参議以上は〈直垂〉、四位は〈狩衣・裏地有〉、五位・諸大夫は〈大紋〉とある。下段左側の人物の着ている狩衣には赤い裏地が有るので四位の位らしい。土井利勝は寛永3年以降は従四位下・侍従であり、この面からみても候補者としての破綻はない。

だが、ここで致命的な点に気付かされた。土井利勝であるならば武士、武士であるならば、〈太刀〉を帯びている筈なのにどこにも見えない。左手に持っているのは何やら、ふさふさした毛が着いた棒のようものではないか？この人物は土井利勝ではない！ここ迄積み重ねてきた推論が崩れてしまった。では、一体誰なのか？候補者は最早いないのでは？謎は謎のまま終わってしまうのか。

上述の候補者の条件を再度見直して見た。見落としていた人物はいないかどうか見つめ直してみた。すると、この人を見逃していた。重要人物を一人忘れていた。

それは、ここまで度々登場してきた船橋大神宮・大宮司・**富基重(従四位下中務大輔)**その人ではなかろうか？家康を始めとした將軍家と富家との結び付きを深めた大きな功績があった人物の筈。富家代々の人達からも追慕・崇拜されていたことであろう。秀忠・家光と共に、肖像画に配されてもおかしくはない。下段左側の人物の装束は高位の神官の姿ではないのか？神職だから狩衣姿であり、当然太刀は帯びておらず、左手に持っているのは〈払子〉では？払子は、元々仏具であり高位の僧侶が持ち虫なぞを追い払うハタキのようなものらしい。神職が仏具というのはおかしい気がしないでもないが、この時代は神仏混淆だ。東照大権現は仏であり、神職が手にしていてもおかしくはなかろう。正面像は宗教性があるとも。

彼の生・没年が不詳であり、年恰好が相応しいのかが分からないのが残念だ。しかし、富基重に違いない！きっとそうだ！漸く違和感がとれ、腑に落ちたのだった。

この肖像画を取り巻く顛末は、恐らく次のようなものであったと一部推定し直したい。

- 富家の人達は、徳川将軍家を追慕し敬う為、肖像画の制作を思い立った。
- 寛永10年(1633) 秀忠公の一周忌の時であったか？
- 家光が常盤社に秀忠公の木像を寄進した寛永16年(1639)の時かもしれない。
- 船橋御殿跡地に富家の子孫が東照宮を建立した貞享年間(1673～1687)の時かも。
- 人物は上段に秀忠、下段右側に家光、下段左側には、家康・秀忠・家光の三代との関わりが深く、富家中興の祖とも云える富基重を配した。時代設定は先述通り
- 発注者は、富基重の子孫の誰か。
- 発注先は、狩野派の公儀や神社の画事を担当した「表絵師」の内の一人に。

富家は、肖像画の掛軸を始め徳川将軍家に所縁の品々を代々コレクションし、常盤御箱に納め常盤社の神宝・家宝として伝えた。それにしても、徳川将軍家の人達と同じ画面に並べて描くのは、畏れ多いことではなかったか？ 作ってはみたものの掛軸として人前で拝むのは憚られたのかも知れない。だからなのか、江戸時代中期以降は常盤御箱は開封出来ない秘蔵の宝とされた。神官代々一子口授という由来書きの中の一節に、「東照宮様御封し候あるゆえ、努々(ゆめゆめ)拝見あるべからず」と念を入れてある。代々伝えられたこの家宝は、幕末の戊辰戦争の戦火も、太平洋戦争の戦火もくぐり抜け、昭和57年(1982) 富家102代目という東金市在住の富 正氏により公開されるに至った。

ここ迄書き終えた或る日、ぶらりと船橋に足を向けてみた。所縁の場所を訪ねて見たくなったからだ。船橋駅から程近い住宅地の路地の奥まった所に、船橋東照宮はあった。辺りを御殿地というようで、ここが嘗ての船橋御殿の中心地か。日本一小さい東照宮と云うだけあって、なる程小さな祠であった。葵の御紋の入った幕の白さが目に染みた。船橋大神宮まではすぐであった。こちらは、住吉だの鹿嶋だの金刀比羅だの全国各地の神様の社も祀られており、大神宮と云うだけのことはあった。ところが、境内の一角に在るはずの常盤社が見つからない。立札も表示板もない、不審に思い社務所で尋ねてみた。すると、本殿北側の向かって右奥に在るが、祭礼の時以外は参拝不可とのこと。その場所に行ってみたが、門が閉じられており、かすかに鳥居は見えるもののその奥にあるという社の姿は見えない。江戸時代の「江戸名所図会」の船橋大神宮の絵にも、常盤社のことは「憚りあるをもて、記さず」とあるらしい。やはり、あの三人画像の肖像画は畏れ多く、憚りのある画であったからなのか？常盤御箱も常盤社も不思議な存在だ。

何故なのか解らないのだが、今回の「家康公の不思議な肖像画」については文献・史料が殆どない。昭和57年(1982)の富氏による家宝公開以降、『千葉日報』の報道、連載記事、『東金市史総集編』(1987年刊)の文章が最後である。肖像画の人物比定はおろか家宝の真贋すら聞こえてこない。何故なのか？このことの方が不思議だ。謎はまだ解けてはいない。

(了)

